

自閉スペクトラム症の天才たち

小川豊昭

昔から、天才と狂人は紙一重と言われてきた。この場合の狂人は、暗黙の裡に統合失調症のことだとされてきた。確かに湯川秀樹の息子たちや、アインシュタインの息子たちは、かなり重度の統合失調症であったことが知られている。そのことから、物理学の天才的能力の素質は統合失調症の素質と遺伝的に何か近いものがあるということがうかがえる。ところが精神医学における近年の進歩により、自閉症の研究が進み、人格のベースに自閉症のある様々なタイプの障害が知られてきた。それらをひとまとめにして発達障害とか自閉スペクトラム症と呼ばれている。自閉症との違いは、言葉を使うことができ、一見普通に見えるという点である。正常人が言葉を身に着けるときは、体を動かすのと同様の仕方で言葉を使うようになると言える。一方、自閉性が土台にある人は言葉を外国語を学ぶように身に着けると言える。すなわち、そもそも自閉系の人にとって言語は異物であり、対象化されているのである。自閉系の人、言語を意識的に取り入れて道具として使うのである。ちなみに物理学では、言語抜きでもの世界に直接接しているものを直接理解していると言える。数学ではこの論理の世界は、言語の世界と等価なものであり、それを対象化して取り入れて使うことになる。さて、ここで、自閉系の天才の代表としてヴィトゲンシュタインを取り上げてみたい。

ヴィトゲンシュタインはオーストリアの哲学者で論理学者である。彼は生涯孤独にさいなまれ自殺を考えていたが、彼の論理学は極めて独創的で思想界にインパクトを与えたといわれている。彼の思想の本質は、この現実世界は言語と論理の世界と等価だというものである。彼は、この世界に突然産み落とされた宇宙人、あるいは昆虫のようなもので、知能と道具としての言葉だけを持っているという状況と考えることができる。他者や共同体の中でその一員であるという感覚を一切持たない部外者である。その彼が、この世界をどう理解したらいいのかと苦闘したのが彼の「論考」などの論理哲学である。彼は、まったく一人だけが

使用する個人的言語は可能かと思案しているが、彼の住む世界はまさにこの個人的言語の世界であって、たまたま周囲の人が使う言語でもあったというだけのことである。このようなあり方はまさに自閉スペクトラム者の住む世界を極端に推し進めたものといえる。彼は、若いころにノルウェー山小屋にこもって執筆した論理学に関する論文で学位を取得することを考え、ムーアを通して大学当局へ打診したことがある。しかし、規定によると、学位論文にはきちんと注が付いていなければならない（どこまでが先行する研究の引用で、どこからがオリジナルな研究かを示すため）。そのため、ウィトゲンシュタインの論文は規定を満たさないので通過しないとの返事がムーアから寄せられた。ウィトゲンシュタインは「どうしてそんなくだらない規定があるのか」「地獄へ落ちたほうがマシだ」「さもないとあなたが地獄へ落ちろ」とムーアを罵倒した。この一件でウィトゲンシュタインは友人と学位を一挙に失い、取り戻すのは実に15年後のこととなる。ヴィトゲンシュタインは、哲学的問題を解決したと考え興味を失い、30代にはスイスの田舎で小学校教師となった。彼なりに一生懸命取り組み、熱心に教えたが、児童がルールを守らないと容赦のない体罰を加えたため、父兄から弾劾されて辞めざるを得なかった。彼自身に悪意はなく、正しいことをしたまでなのだろう。彼はこのエピソードにひどく傷ついたといわれているが、生徒や父兄にも深い傷跡を残したはずである。

次にフォン・ノイマンを取り上げてみる。ハンガリー出身の数学者でコンピューターの創始者と言われている。広島、長崎の原爆開発にもかかわっている。暗算と暗記にずぬけており、IQは300といわれている。当時の数学者が何か月もかかった問題を瞬時に暗算で解いたという逸話もある。私は、彼は高機能自閉スペクトラム者の一つの極限の姿を示していると考えている。ベースが自閉症者である場合、自然な自明性や共感や雰囲気になじむということがないのであるが、彼は、知的に補うことで正常者のようにふるまうのである。どのようにして正常者のようにふるまうかという、二つのメカニズムが機能していると考えられる。一つは、ふるまいのマニュアル化であり、もう一つは他者の気持ちのシミュレーションである。この二つともスムーズに機能するためには非常に

高い知能が必要となる。自閉スペクトラムの採用するマニュアルとは、たいていはあまり精緻なものではなく、声を掛けられたらニコニコしてうなづくとか自慢はしないとこういうレベルのものであるが、怒ったりせずニコニコしているとほとんどの共同体でいい人だということで受け入れられるものである。ただ、これでは夫婦などの緊密な関係はうまくいかないのは、当然である。一方の他者の気持ちのシミュレーションは、「相手の身になって考える」という仕方である。「相手の身になって考える」は正常者の他者理解ではないかと反論される方もいるかもしれないが、このように相手の立場に自分を置いてみてその状況を再現しシミュレートするのは自閉系の人のやり方である。正常者は、自分の子供が駆けてきて目の前で転んで顔面を岩にぶついたら、自分の顔に激しい痛みを感じるのである。そこでの経験は、ダイレクトであることがわかる。ところが現象学の創始者であるエドモンド・フッサールは、間主観性がどのように可能であるかを論じて、類比的対化という概念を提出している。これはそもそも人間が他者の主観を認識するのにどうしているかという議論で、自分を他者の位置においてペアを作り類比しているというのである。はっきり言って、こんな理論を作るということだけでもフッサールが自閉スペクトラム者であることがわかる。

さて、フォン・ノイマンに戻ろう。高校時代、彼は同窓生たちによるとみんなから好かれようと懸命に努力しており、いばるそぶりや自分の殻に閉じこもって周囲を無視するようなことは無かったと報告されている。好かれようと懸命に努力というのは、思春期には大いにありうることであるが、そもそも雰囲気を読めない彼は仲間関係のやり取りを子細に観察して、こういう態度をされたときは、このように答えるというような精緻なマニュアルを作って蓄えていったと思われる。彼は、研究者仲間の中では、いつもジョークを連発して周囲には笑いが絶えなかったという。とても明るい良い人を演じていたのであるが、実際は、無数のジョークを暗記していて、連発していたにすぎないのである。実際、親密な関係である夫婦関係は破たんして離婚へ至っている。彼の伝記で注目すべきなのは、運動が全く駄目だったという点である。これは、多くの自閉スペクトラム者の特徴である。身体としての言語が自然に使えないの

と同様に自分の身体を自然に使えないのである。
(保健科学部)

トピックス 2 2023年度における健康・スポーツに関するガイドライン等の改定

田中憲子

昨年の夏、学外の方から、研究者の健康増進を目的とした企画についての相談を受けたことがありました。面白い企画だと思いましたので、無償で協力することにしたのですが（この件については後述します）、先方との一連のやり取りで気になったのは、健康の維持・増進のために必要となる運動の量や内容が、一般の方には未だに浸透していないことでした。

本誌にも何度か掲載されてまいりましたように、厚生労働省は、10年前に「健康づくりのための身体活動基準2013」「アクティブガイド」を策定しました。そこには、以下のように記載されております。

- ・「18～64歳の場合、歩行またはそれと同等以上の身体活動を毎日60分行う。また、息が弾み汗をかく程度の運動を毎週60分行う」
- ・「65歳以上の場合、横になったままや座ったままにならなければどんな動きでもよいので、身体活動を毎日40分以上行う」

これらの基準を満たすことで「糖尿病、心臓病、脳卒中、がん、ロコモティブシンドローム、うつ、認知症などになるリスクを下げるができます」。そして、「前世代共通の方向性として、身体活動量を今より少しでも増やす（例えば10分長く歩く）」という目標とともに、「+10（プラス・テン）から始めよう！」というキャッチフレーズが掲げられています。偶然にも私は、名古屋大学への赴任前に「健康づくりのための身体活動基準2013」等の策定に、レビューボードアシスタントとして関わっておりました。第1次レビューで約2500編、第3次レビューでは約250編まで絞り込まれた論文から、基準値策定に必要な情報を抽出・整理するという作業内容でした。私は当該研究所に流動研究員という立場で所属しておりましたし、第2子を出産した直後でしたので、他の先生方に比べ、作業量は少ないものでした。それでも私にとっては大変な作業であったと同時に、作業を通じて多